



春の夜

十市梨夫

春の総会の席で陽一は思いがけなく、地区の青年團長に選ばれた。この農家の一人息子は、高校をでるとすぐ家業の手伝いを始めて四年になるが、かれに社会的な地位を与えられたのはこれが最初である。かれはひそかな喜びと同時に、双肩にのしかかってくる責任の重さを感じた。

帰途は隣部落の美和といっしょだったが、二人の話題は青年団活動についてではなかった。

「勤めはおもしろいのかね」と陽一が訊いた。

「人に使われることはあまり愉快なことではないけれど、母の毎日を見てみると、わたしは農家の生活がこわいのよ」

「結婚は農家へはいやということだね」

「そこまでは考えていないけれど」

男の声に失望の響きがあったので、女は断定することを避けた。

「若い人はみんな勤めにていているのに、あなたはずいぶん働かないの」

「跡継ぎ息子は身動きできないよ」

「あなたみたいなのが泥にまみれて生きてゆくなんて惜しいわ」

その言葉で男はふと女の眼を見た。しかし闇が、うつろいその眼の光を遮っていた。

自分のこのひそかな想いを、この人は知っているだろうか、男は考えた。

おれは土の生活から離れない眼帯に、住宅団地造成の話を持ちこ

つかり身軽な気持ちになつて、だが、浮きたつてくる気持ち裏には、もう一つ別な理由があった。

陽一達の住んでいるこの地区一帯に、住宅団地造成の話を持ちこ



りこの人と結ばれることはないだろう。するとふいに悲哀が、男の眼の奥に宿った。

一年経ってまた青年団の総会が開かれ、その席で陽一は團長を交替したが、その夜も美和と連れ立って帰った。

團長は交替したことで、陽一は

まれてから半年近くなるが、それがいよいよ本決まりとなったことだった。そのために陽一の家も田畑の殆んどを提供しなければならなくなったが、その打撃よりも百姓をやめると決めたことで諦めていた美和への想いが、ふいに烈しく燃え広がってきた。

「団地の話も決まったし、ぼくも勤めにすることに決めたから、これからは君の希望通りの生活ができそうなんだが、どうだろうかよかったですらぼくと結婚してくれないか」

雑木の間に美和の家の灯りが見えた時、陽一はやつと言った。

「だめよ。遅かったわ、その話はまだもう言わないで」

男の言葉を聞くと美和は俄かに不機嫌になった。

「約束した人がもういるんだね」

男は重ねて静かに言ったが、女は僅かに頷いただけだった。

美和の約束した相手は会社の同僚だ。その人は街に住んでいて、もちろん泥に汚れる必要はなかったが、サラリ以外に物質的な背景は何もなかった。だが陽一には大きな物質上の支えがある。人柄だって、わたしは子供の頃からこの人を好きだったと、美和は思い返した。自分は人生の一步を誤ったのだ。たぎりたつてくる苦悶の嵐が、早い速度で美和の胸に渦を巻いた。

それを男は女の不機嫌を表情と受取ったに過ぎない。

話がつきた時、二人は部落の別れ跡へきていた。いまはもう右と左に別れるより仕方がなかった。二人は手も握り合わないで別れた。

体を触れ合ったことのない愛情は、こんなにもあつてなく消え去るものだろうか。だが、男も女も一人になって闇の中立つてみると、人を恋したことのかなしみが、互いの胸にひろがった。

決ままして、社会福祉のため有意義に使用させていただきます。

犬は放し飼いにしないで

決ままして、社会福祉のため有意義に使用させていただきます。

犬は放し飼いにしないで

副議長顔写真の氏名は橋田信夫氏の誤りです。訂正しお詫びいたします。

▲善意銀行便り▼

地区ご芳名(敬称略) ご寄贈品名

日章 北村美義 杖

有沢 泉 ラジオ

大森 松田(朝日新聞)衣類、寝具

細木 勝 同

門田政衛 同

後見 藤村電気 同

野田小P T A 同

マルハチセンター 現金

長岡 山岡ふみ子 衣類、寝具

東条五郎 現金

島崎重盛 香典返し

中島老人クラブ 衣類

匿名の方 香典返し

皆様方のご厚志を深く感謝いたします。運営委員会により使途を

決ままして、社会福祉のため有意義に使用させていただきます。

犬は放し飼いにしないで

郵便を配達中の職員が犬の被害にあうことが多いので、じゅうぶん注意してください。

南国郵便局